

西戸古墳群(入間郡毛呂山町)

さいど
西戸1号墳

ここは西戸親水公園



その北西すぐ近くにある民家の裏側に高まりがある/正面の高まりの上に祠が見える



近づいてみる/これが1号墳/円墳/6世紀末から7世紀初頭の築造とされる/東側から見る



墳頂に登ってみよう











葺石のようなものが散在する



北側から見る



墳丘東側法面を見る



墳丘北側法面を見る



西戸4～6号墳

正面の木立の左手前の部分が4号墳/西側から見る



左手前の低い高まり



南側から見る



アップで見る/これが4号墳/円墳/6世紀末から7世紀初頭の築造とされる



西側から見る



さて、これは東側から見る/木立の向こうに4号墳がある



アップで見る/この手前の高まりが5号墳



これが4号墳/円墳/6世紀末から7世紀初頭の築造とされる



反対側から見る



北側へ回って木立の両サイドに4号墳(右手)、5号墳(左手)を見る



これが4号墳



これは5号墳



さて、正面は近くにあったちょっとした高まり



6号墳の場所は発見できず



参考(西戸2号墳)

ここは毛呂山町歴史民俗資料館



その奥に西戸2号墳が復元されていた



説明板が立っている



西戸2号墳

北志山町の雄冠川流域にある古墳群のうち、最も上流にあるのが西戸古墳群です。この古墳は明治26年(1893)に一度発掘されましたが、平成22年度に再び本格的な発掘調査を行い、この度資料的に石室を詳しく発掘調査時の状態に復元いたしました。

発掘調査の結果、古墳の周りに掘られる溝(周溝)は発見されず、墳丘を河原石で覆う墓石が古墳表側でわずかに見られたものの、本来どのような形の古墳であったかは判りませんでした。

石室は、瀬尻層砂岩の切石を用いた横穴式石室です。瀬尻層砂岩は奥志山町を中心とした北志地方の巻懸丘陵に見られることから、当地から石室構築材として切り出された可能性があります。明治期の発掘により、石室の天井や壁の一部は彫刻を留めていませんでした。石室は、全長2.15m、最大幅1.53mでほぼ真に開口していました。石材に切り込みを入れ、石と石とが互いにかみ合っているほか、1段目と2段目の石材との間に扁平な石を外側からはさみ、やや内傾を葆らながら積み上げる技術も見られました。墳丘の構築のようすは、石室外側の砂利(墓心の)と黒色の粘土が交互に盛られていることでよく判ります。

西戸2号墳は、古墳紀元から7世紀初頭に築造されたようですが、石室内から8世紀頃の遺物が出土していることや、3人以上の人骨も確認されていることから、横穴式石室の特徴の一つである羨道がなされたと考えられます。

雄冠川流域の古墳は、石室に多くの河原石を用いる傾向がありますが、瀬尻層砂岩の切石も用いられていることで、古墳時代後期の多様な埋葬施設をうかがうことができました。なお、石室内から出土したガラス小玉、須恵器系陶器、金環等の副葬品は資料館に展示されています。

平成21年3月
北志山町歴史民俗資料館

発掘調査時の墳丘断面図



墳丘の断面(墳丘構築のようす)



墓心めと村土のようす



西戸2号墳(南側土窓から)

西戸2号墳

毛呂山町の越辺川流域にある古墳群のうち、最も上流にあるのが西戸古墳群です。この古墳は明治26年(1893)に一度発掘されましたが、平成2年度に再び本格的な発掘調査を行い、この度資料館に石室を移し、発掘調査時の状態に復元いたしました。

発掘調査の結果、古墳の周りに掘られる溝(周溝)は発見されず、墳丘を河原石で覆う葦石が古墳東側でわずかに見られたものの、本来どのような形の古墳であったかは判りませんでした。

石室は、凝灰質砂岩の切石を用いて築いた横穴式石室です。凝灰質砂岩は東松山市を中心とした比企地方の岩殿丘陵に見られることから、当所から石室構築材として切り出された可能性があります。明治期の発掘により、石室の天井や壁の一部は原形を留めていませんでした。石室は、全長2.15m、最大幅1.53mでほぼ南に開口していました。石材に切り込みを入れ、石と石とが互いにかみ合わさっているほか、1段目と2段目の石材との間に偏平な石を外側からはさみ、やや内傾を保ちながら積み上げる

技術も見られました。墳丘の構築のようすは、石室外側の砂利（裏込め）と黒色の封土が交互に盛られていることでよく判ります。

西戸2号墳は、6世紀末から7世紀初頭に築造されたようですが、石室内から8世紀頃の遺物が出土していることや、3人以上の人歯も確認されていることから、横穴式石室の特徴の一つである追葬がなされたと考えられます。

越辺川流域の古墳は、石室に多くの河原石を用いる傾向がありますが、凝灰質砂岩の切石も用いられていることで、古墳時代後期の多様な埋葬施設をうかがうことができました。なお、石室内から出土したガラス小玉、須恵器長頸壺、金環等の副葬品は資料館に展示されています。

平成10年3月

毛呂山町歴史民俗資料館

発掘調査時の墳丘測量図



封土(古墳の盛り土はおもに黒色土で、質の異なる土が何層も盛られていました。)

墳丘の断面 (墳丘構築のようす)



裏込めと封土のようす



西戸2号墳（南側上空から）

南側から見る



明治26年に発掘した時の様子を漢文で記した石碑/2号墳の墳頂に立てられていた



西戸古塚記

この石碑は西戸二号墳上に建てられていたもので、明治二六年（一八九三）にこの古墳を発掘した時の様子を記したものです。縦書一〇行、漢文により刻まれ、その概要は次のとおりです。

入間郡川角村西戸に、行任塚という古い塚がある。今年の秋、長雨により表土が崩れて石が出てきたので下を掘ってみると、槨（横穴式石室か）がすがたをあらわした。槨の内部は分かれて二つになっていて、その広さはどちらも一丈（畳）ばかりであった。中からは人骨、刀、鏃、金環が発見され、人骨は数体分あり、主従関係にあるようで、殉死者がいたようだ。この古墳は、行任その人の古墳であろうか。生きた人がいっしょに葬られたのであるから、この墓の被葬者は貴人と考えられる。

この土地の所有者は供養のために石碑を建てることを考えられ、私（この碑文の作者）も同感であるから、明治癸巳の初冬（明治二六年）、古塚の由来を書き記したのである。

なお、地元には、道祖士の祖である平維新（行任）という人物が初めてこの地に入り、行任塚はこの人の墓であり、近くの丸山城（不明）は平維新が築いた城であるという伝説があります。

殉死者や平維新伝説といった内容は史実とは考えられないでしょうが、これらの碑文や伝説から、明治中頃のひとびとがどのような思いで古墳をみつめていたのかが理解され、たいへん貴重な資料となっています。

復元された横穴式石室



西側から見る



参考ホームページ

http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/moroyama_sai1/

http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/moroyama_sai2/

http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/moroyama_sai456/

<http://nipponsanpo.fc2web.com/sanpo/sanpo200306082.html>

<http://www.town.moroyama.saitama.jp/www/contents/1287035891013/index.html>

